

年 譜

——音楽取調掛から明治時代の東京音楽学校
(明治十二年～四十五年)——

(注) 東京音楽学校になってからの教官の任用は○の欄で記すことにした。()内は担当科目、つづく年代は退職年度を示す。講は時間講師を示す。

明治五年(一八七二)

七月 学制頒布小学校に「唱歌」が、中学校に「奏樂」が置かれる。だが「當分コレヲ缺ク」という但し書がつき実施されず。

同七年(一八七四)

三月 伊澤修二愛知師範学校長に就任、付属施設として幼稚園風のものを受け、幼児に遊戯唱歌を試みる。

同八年(一八七五)

七月十八日 伊澤修二、師範学科取調のためアメリカ留学を命ぜられ横浜を出航。

同十年(一八七七)

十一月六日 東京女子師範学校において保育唱歌による教育がはじまる(雅楽部伶人の作曲)。

同十一年(一八七八)

四月八日付在米留学生監督官目賀田種太郎および伊澤修二の連名で「學校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業ニ着手スベキ見込書」を文部大輔田中不二麿に提出。

四月二十日付目賀田種太郎「我公學ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ

見込」を文部大輔に提出。

五月二十一日 伊澤修二帰国、東京師範学校雇となる。

六月 伊澤修二「唱歌法取調書——メーソン方式の掛圖つき」を文部大輔に提出。

八月 伊澤修二文部省学務課を兼務。

十月十六日 伊澤修二東京師範学校長補。

十月二十五日 伊澤修二文部省内に体操伝習所を創設し、その主幹を兼務する。

同十二年(一八七九)

三月八日 伊澤修二「音楽傳習所案」を文部省に提出。

三月二十二日 伊澤修二東京師範学校長。

三月二十五日 メーソンの日本招聘が決る。

十月七日 伊澤修二音楽取調御用掛を兼務、体操伝習所主幹を解かれる。

十月二十三日 文部省内に音楽取調掛が設置される。

十月三十日 伊澤修二、文部卿寺島宗則に宛て「音楽取調ニ付見込書」を提出、この中で三大事業①「東西二洋ノ音楽ヲ折衷シテ新曲ヲ作ルコト」②「將來國樂ヲ興スベキ人物ヲ養成スルコト」③「諸學校ニ音楽ヲ実施スルコト」をかかげる。

同十三年(一八八〇)

三月 本郷文部省用地内第十六番館(現東京大学法文経一号館の場所)を改築し、音楽取調掛官署とする。

三月二日 アメリカ人ルーサー・ホワイトイング・メーソン Luther

Whiting Mason 文部省お雇い教師として着任。

四月 音楽取調掛にはじめてピアノが備えつけられる(メーソン持参のピアノ)。

四月 メーソンにより東京師範学校および東京女子師範学校において唱歌教育がはじまる。

五月二十八日 アメリカよりピアノ十台および楽譜・図書類が到着(この中に英語版バイエル教則本二十冊が含まれている)。

六月七日 山勢松韻(箏)、国文学者の稲垣千頌、柴田清熙、英学者内田彌一を雇い入れる。唱歌教材の作成開始。同日付伝習生募集案を提出。
 六月二十三日 雅楽器十四点、俗楽器七点、清楽器十八点、チェロを購入。
 七月二十九日 大阪専門学校(後の第三高等学校、現京都大学)より印度音楽関係図書(タゴールの著書など)四十冊回送。
 九月 音楽伝習規則を作成。
 十月五日 十八名の伝習生入学、十一日 四名入学、この中に宮内庁雅楽部伶人八名が含まれている。
 十月十二日 芝葛鎮(伶人・調絃法)、十八日 岡倉覺三(天心・官吏)、二十八日 西幸吉(能楽手)を雇い入れる。
 同十四年(一八八一)
 二月 第二回伝習生募集を新聞に広告する。十二名入学。
 二月十日 第一回の伝習生雅楽伶人の東儀彭質、上眞行、辻則承、奥好義を雇い入れる。
 五月 小学校教則綱領制定、唱歌科は教授法の完備次第実施となる。内田彌一音楽取調掛監事。五月十四日 国文学者里見義、六月十一日 同加部巖夫雇い入れる。
 五月二十四日 東京女子師範学校に皇后陛下下行啓のおり音楽取調掛員が管弦楽を演奏。
 九月 メーソン学習院への出校開始、中村専助教となる。メーソンによる和声講義開始。
 九月十五日 芝葛鎮音楽取調掛監事となる。
 十月二十六日 伊澤修二、東京師範学校校長兼任を解かれ音楽取調掛長となる。
 十一月十日 神津専三郎音楽取調掛監事(音楽史担当)。
 十一月二十四日 『唱歌掛圖』初編および『小學唱歌集』初編の出版届。
 十二月 本邦第一号オルガン試作。
 同十五年(一八八二)
 一月 文部卿の命により国歌選定の仕事に着手。

一月 伊澤修二「事務大要」を文部卿に提出。
 一月三十、三十一日の両日神田昌平館において「音楽取調掛成績報告」演奏会を挙げる。
 三月 永井繁(瓜生繁)を雇い入れる。第一回伝習終了者加藤貞、鳥居忱、藤川さゝる助手に採用。
 五月 上原六四郎(理化学)専門学務局兼取調掛勤務。
 七月一日 昌平館においてメーソン送別演奏会開催、十三日 メーソン横浜より一時帰国の途につく。
 九月 四年制のカリキュラムを作成。
 十一月六日付メーソン解雇伺提出。
 十一月二十日 関東十二府県学務課長に対し伊澤の示諭と演奏会を開催同十六年(一八八三)
 一月 文部省から男女共学に対する批判があり、女子の入学を禁ず。
 一月二十二日 エッケルト歓迎演奏会開催。
 二月十日 海軍省雇教師フランツ・エッケルト Franz Eckert 音楽取調掛を兼務する。管弦楽、和声、楽典を受け持つ。
 二月二十七日付四年制の教則および教科細目を含む「音楽取調掛規則案」八章四十八ヶ条を本省へ提出、六月二十八日付裁可。
 三月 メーソンを正式に解雇。
 三月二日 多久随第一回伝習生、式部寮伶人兼取調掛助教となる。
 六月 『唱歌掛圖』第二編、『小學唱歌集』第二編出版。
 七月十一日 期末演習会開催、ワグナーの「タンホイザー」よりへ夕星の歌が管弦楽で演奏される。
 七月 『約氏音楽問答』『音楽指南』出版。
 九月 四年制実施。
 十二月一日 奥山朝恭を雇い入れる。
 同十七年(一八八四)
 一月二十三日 大木文部卿巡視に際し演奏会開催。
 二月七日付伊澤修二、文部卿大木喬仁に『音楽取調成績申報告』を提出。

三月二十九日 『小學唱歌集』第三編の出版届、六月出版。
四月 各府県長宛、府県派出音楽伝習生募集案内を発送。

四月 『樂典』出版。

五月十日 第一回月次演奏会開催。

五月十二日 京都吏員等参観に付演奏会開催。

五月 英国ロンドン万国衛生教育博覧会へ和楽器および音楽取調掛作成の書物を出品。

六月十四日 第二回月次演奏会開催。

十月九日 東京府外十二県連合学事協会参観に付演奏会開催。

十月十六日 嶋津珍彦外九名参観に付演奏会開催。

十二月 アメリカ・ニューオーリンズ綿百年期博覧会へ和楽器および音楽取調掛作成図書類を出品。

この年 『箏曲集』初編の編集完了。

同十八年(一八八五)

一月十七日 第三回月次演奏会開催。

二月九日 音楽取調掛は音楽取調所と改称、本郷から上野東四軒寺跡(現科学博物館の所)へ移転。

四月二日 多忠廉、多忠孝(伶人)宮内庁と兼務で音楽取調所員となる。

五月九日 陸軍省雇教師シャルル・ルルー氏を迎え演奏会開催。

七月二十日 第一回全科卒業生三名幸田延、遠山甲子、市川ミチの卒業式を挙行、つづいて演奏会を開催。同月二十七日 前記の三名および

加藤精一郎(十七年十二月入学)を助手に採用。

十月 ロンドン万国発明品博覧会に和楽器および音楽取調掛考案の音叉と図書類を出品、音叉はアレキザンダー・J・エリス Alex. J. Ellis の

注目をひく。出品物全部に対し金メダルを受賞。

十二月 音楽取調所は再び音楽取調掛となる。

この年より東京師範学校など他校への音楽取調掛員の出向を廃止する。

同十九年(一八八六)

三月三十一日 エッケルト解雇。

四月一日 オランダ人G・ソープレット Guillaume Sauvlet ユー・ソープレット教師として雇い入れる。

十一月 伊澤修二他七名の連署をもって文部大臣森有禮に「音楽學校設立ノ儀ニ付建議」を提出。

同二十年(一八八七)

二月十五日 音楽研究生を置き研究生条規を定める。

二月十九日 第二回全科卒業式挙行(十四名)、つづいて演奏会を開催、

ベートーヴェンの交響曲をソープレットの指揮のもとで演奏、聴衆約五百名。この日の卒業生十名を研究生として在学を許可。

二月 音楽取調掛伝習生三十名入学。

三月 音楽取調掛の女生徒入学を復活する。

七月五日 明宮殿下(のちの大正天皇)および内外の貴賓約五百名を迎え演奏会を開催。

九月 音楽取調掛最後の伝習生六名入学。

十月 音楽取調掛、東京音楽学校となる。十月五日開校(官報告示十月四日)。

十二月 『幼稚園唱歌集』出版。

◎上眞行(和声・音楽教授法) 明治二十八年。大正四年から昭和二年まで囑託教師として音楽史と雅楽を担当する。

菊地武信(唱歌) 明治二十四年

遠山甲子(ピアノ・オルガン) 明治三十六年

神津専三郎(幹事、音楽史・英語) 明治二十七年

瓜生繁(ピアノ) 明治二十五年

辻則承(講、ピアノ・唱歌) 明治二十四年

納所辨次郎(講、ピアノ) 明治三十六年

チーチェ夫人 Johanna Bertha Maria Tieze (講、ピアノ) 明治二十二年

同二十一年(一八八八)

一月 文部省編輯局長伊澤修二、東京音楽学校校長を兼任。

十一月五日 ルードルフ・ディットリヒ Rudolf Dirrich (オーストリア人、ヴァイオリン・和声・合唱・管弦楽) 明治二十七年。

同二十二年(一八八九)

一月 東京音楽学校規則を制定、学科を分けて予科および本科とし、本科を師範部と専修部に分ける。学年は九月十一日に始まり、翌年七月十日に終る。ソープレット解雇。

四月 幸田延初の音楽専修者として文部省より海外留学(オーストリア)を命ぜられる。

七月 東京音楽学校専修部初卒業生四名を送り出す。

十一月三日 天長祝賀音楽会開催。

十二月二十二日 師範部生徒八名卒業。

十二月 『中等唱歌』(〇埴生の宿)が含まれている)を出版。

◎木村作子(雇教員) 明治二十三年

森富子(雇教員) 明治二十三年

授業補助 山田源一郎 明治二十四年

同二十三年(一八九〇)

五月 上野公園元西四軒寺跡文部省用地(現在地)の新築校舎(奏楽堂を含み四二二坪)に移転、十二日新築校舎開校式、演奏会を行う(七曲演奏したという記録があるが詳細は不明)。

十一月二十九日 奏楽堂において帝国議院式祝賀音楽会、伊澤校長祝辞を述べる。

同二十四年(一八九一)

一月 議会で東京音楽学校存廃論争が起る。伊澤修二、矢田部良吉、神津専三郎ら反論。

六月 校長伊澤修二非職を命ぜられる。神津専三郎校長心得を命ぜられる。

六月十八日 伊澤の非職に対し、生徒代表が大木文部大臣に伊澤の復職を陳情。

七月十三日 教職員ならびに生徒による伊澤氏の慰労会。

八月 理学博士村岡範爲校長となる。神津専三郎の校長心得を解く。

十月 文部省は東京音楽学校教職員全員に対し、祝祭日歌詞楽譜選定事業の補助を命じる。

◎黒川眞頼(文学) 明治三十二年

上原六四郎(音楽理論) 明治四十五年

鳥居忱(和漢文・音楽理論) 大正二年

山勢松韻(箏) 明治三十三年

同二十五年(一八九二)

佐藤誠實(文学) 明治二十七年

二月十六日 オーストリアの伯爵来校、生徒による箏曲合奏等を披露、賞賛を受ける。

十一月 東京音楽学校校友会の創設。

◎本居豊頼(和文) 一年間のみ

中村秋香(帝国大学書記兼第一高等中学校教授、文学) 明治三十六年

大和田建樹(和歌) 明治三十六年

小山作之助(唱歌・オルガン) 明治三十五年

能勢作(ピアノ・オルガン) 明治三十五年

山谷徳治郎(音楽的生理) この年のみ

授業補助 橘絲重(ピアノ)、石岡得久(ヴァイオリン)、瀬川朔(英語)

同二十六年(一九一三)

四月十日 医学会員七百名来校、村岡校長の講演と演奏を披露。

四月 シカゴ・コロンブス世界博覧会に日本音楽および本校出版図書等

を出品。

六月 高等師範学校附属音楽学校となる。祝日大祭日歌詞および楽譜の審査終了。

九月十日 勅令第六十二号により、東京音楽学校職員は廃官となり高等

師範学校附属音楽学校職員となる。嘉納治五郎(東京女子師範学校

長)校長となる。

◎中村秋香(文学) 明治三十六年

旗野十一郎(文学) 明治四十一年

授業補助 島崎赤太郎(オルガン)、鈴木米次郎(音楽理論・作曲)

同二十七年(一八九四)

六月 入学時は毎学年の始め一回の規定を改め、時宜により臨時試験を行い入学を許可すると定める。小学校唱歌科教員志望者のため小学唱歌講習科を新設、最終学年生が実習を兼ねこの授業を担当することとなる。

十一月 奏楽堂においてグノー「ファウスト」第一幕、在日外国人により上演。

●頼母木駒(ヴァイオリン) 昭和三年

山田源一郎(唱歌・オルガン・ヴァイオリン) 明治三十六年

奥好義(講、唱歌) 明治三十五年

橘絲重(講、ピアノ) 明治二十八年

島崎赤太郎(講、オルガン) 明治三十三年

同二十八年(一八九五)

十一月九日 幸田延、ウィーン留学より帰国。

●渡邊龍聖(倫理・教育学) 明治四十二年

幸田延(ピアノ・ヴァイオリン・独唱歌・和声学) 明治四十四年

高橋忠次郎(体操) この年のみ

同二十九年(一八九六)

三月 本科専修部に対し教育学科の比重を重くする旨規則を改正。

四月 生徒の服装を文部省直轄学校の制服に同じくする。徽章を設ける。

東京音楽学校同声会第一回演奏会。

●橘絲重(ピアノ) 昭和三年、以後十四年まで嘱託講師

比留間賢八(講、チェロ) 明治三十一年

同三十年(一八九七)

四月 小学唱歌講習科の規程を改正し、小学校教員に限らず広く志望者の入学を許可。

同三十一年(一八九八)

五月 東京市神田区一橋通高等師範学校附属地に分教場を設置、選科の一部および小学唱歌講習科を移す。

六月 矢田部良吉(高等師範学校長)、東京音楽学校校長となる。

十月 春秋二季に定期演奏会を行うことを定める。

●R・フォン・ケーベル Raphael von Koebel(東大専任、ピアノ・音楽史) 明治四十二年

武島又次郎(国文学) 明治四十三年

下田次郎(教育学) この年のみ

今井新太郎(箏) 大正十五年

高木武(オルガン) 明治三十四年

橋本正作(唱歌・ピアノ) 明治三十四年

天谷秀(オルガン) 明治四十一年

多忠龍(伶人、講、クラリネット) 大正五年

東儀俊龍(伶人、講、コルネット) 大正十五年

大村恕三郎(伶人、講、フルート) 明治三十八年

多忠基(伶人、講、ホルン) 大正十年

同三十二年(一八九九)

四月 東京音楽学校再独立、独立祝賀会委員より額面百円の公債証書の寄附を受ける。この利子を奨学金に当てる。皇后陛下行啓。

五月二十六日 幸田幸、文部省よりオーストリア・ウィーン音楽学校へ留学を命じられる。

八月 渡邊龍聖(本校教授) 校長となる。

十月 名古屋・京都方面へ生徒の修学旅行。

●A・ユンケル August Junker(管弦楽) 明治四十五年

岡倉由三郎(英語) 明治三十四年

中島半次郎(教育学) 明治三十七年

田村虎藏(唱歌・オルガン) 明治四十四年

藪廣虎(伶人、講、コントラバス) 大正五年

下村芳子(講、ピアノ・オルガン) 明治三十四年

授業補助 瀧廉太郎 (ピアノ)

同三十三年 (一九〇〇)

九月 本校規則を大幅に改正、学科を分けて予科、本科、研究科、選科とする。本科を分けて声楽部、器楽部、楽歌部とし、師範科を分けて甲乙二種とする。

① アンナ・ラール Anna Laehr (ピアノ) 明治三十七年

ノエル・ペリー Noel Peri (和声・作曲) 明治三十六年

佐方鎮 (諸礼) 明治三十六年

杉浦 (旧姓高木) チカ (唱歌・ピアノ) 大正六年

坪井玄道 (舞踏) 明治四十五年

山縣菊 (講、ピアノ) 明治三十七年

野村成仁 (講、オルガン) 明治三十六年

同三十四年 (一九〇一)

三月 『中学唱歌』 出版 (瀧廉太郎作曲の『荒城の月』『箱根八里』等を含む)。

① 多梅稚 (唱歌) 明治三十六年

菊地ミチ (講、英語) 明治三十八年

同三十五年 (一九〇二)

五月 皇后陛下行啓。

十月一日 校長渡邊龍聖、清国政府の招聘に応ずる。

十月二十七日 大島義脩 (本校教授) 校長となる。

① 島崎赤太郎 (オルガン) 昭和七年

中村 (旧姓下村) 芳子 (ピアノ) 大正四年

ヘルマン・ハイドリヒ Hermann Heydrich (ピアノ・管弦楽・指揮法) 明治四十一年

神戸絢 (ピアノ) 昭和七年

幸田 (安藤) 幸 (ヴァイオリン) 昭和七年

赤川寅次郎 (教育法) 明治三十七年

富尾木知佳 (審美学) 大正六年

楠美恩三郎 (オルガン) 大正六年

高橋勢以 (箏) 昭和五年

鈴木代吉 (講、体操) 明治三十六年

渡邊森藏 (講、オルガン) 明治四十一年

同三十六年 (一九〇三)

七月 ペリー指揮下にグルックの「オルフォイス」奏楽堂において上演。

① 内田象太郎 (楽典) 明治四十一年

芝忠重 (伶人、講、オーボエ) 大正五年

石野巍 (ヴァイオリン) 明治三十八年

同三十七年 (一九〇四)

二月 高嶺秀夫 (東京高等師範学校校長) 東京音楽学校校長を兼任。

① 星菊太 (倫理) 明治三十九年

井口あぐり (方舞) 明治三十九年

安藤勝一郎 (英語) 明治三十九年

金森小壽 (倫理) 明治四十一年

麻生富久 (講) この年のみ

授業補助 岡野貞一 (楽典・ピアノ・唱歌)、前田久八 (ピアノ)、前田

襄 (ヴァイオリン)、本多かつ (ピアノ)、吉川やま (唱歌・ピアノ)、

柴田環 (唱歌)、大門トク (オルガン)

同三十九年 (一九〇六)

三月 本校規則改正により学年学期は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。創立記念日を十月四日に改める。

① 岡野貞一 (唱歌) 昭和七年、以後十六年まで嘱託講師

石倉小三郎 (英語) 明治四十一年

野村三郎 (英語) 大正三年

林博太郎 (教育学) 明治四十二年

多忠告 (講、フリユート) 大正五年

授業補助 鳥居つな (ヴァイオリン)、東儀哲三郎 (ヴァイオリン)

同四十年（一九〇七）

二月 規則改正により従来の成績順席次をやめ、すべてイロハ順席次とする。

六月 湯原元一（北海道庁事務官）校長となる。

十月 邦楽調査掛および文部省唱歌編纂掛を設置。

十二月 定期演奏会において本邦初のチェロ独奏が披露される（演奏者ヴェルクマイスター）。

授業補助 中田章（オルガン）

同四十一年（一九〇八）

一月 楽語調査掛設置。

五月 「オルフォイス」の再演、風紀を乱すという理由で禁止。

八月 風紀問題に関し文部省より嚴重な取締りを受ける。

◎ハインリヒ・ヴェルクマイスター Heinrich Werkmeister (チェロ・コントラバス) 大正九年

シャルロッテ・フレック Charlotte Fleck (声楽) この年のみ

吉丸一昌 (倫理・国文学) 大正四年

乙骨三郎 (ドイツ語・英語) 昭和七年

倉辻フキ (講、ピアノ) 明治四十五年

吉川 (旧姓戸倉) やま (講、唱歌) 大正二年

喜多襄 (講、ヴァイオリン) 大正五年

藤井 (旧姓柴田のちの三浦) 環 (講、唱歌) 明治四十二年

吉岡郷甫 (講、歌文) 明治四十五年

藪十一郎 (伶人、講、フレンチホルン) 大正六年

南能衛 (講、オルガン・楽理) 明治四十五年

授業補助 多久寅 (ヴァイオリン)、川久保美壽々 (ピアノ)

同四十二年（一九〇九）

三月 規則改正により予科二年、本科は学年制を廃して三年以上五年以内とする。本科の楽歌部および研究科の作歌部を廃する。

五月 本郷区西須賀町二に女生徒の仮寄宿舎を設ける。

◎村田ミイ (箏) 昭和五年

高野辰之 (国語) 昭和十一年

田村寛貞 (ドイツ語) 昭和三年

ルドルフ・ロイテル Rudolph Ernest Reuter (ピアノ・作曲) 明治四十五年

授業補助 大塚淳 (ヴァイオリン)、川上淳 (ヴァイオリン)、山井基清 (ヴァイオリン)、山田耕筰 (唱歌)、本居長世 (ピアノ・和声学)、久野ひさ (ピアノ)

同四十三年（一九一〇）

一月 『學友會雜誌』を『音楽』と改称、公に刊行はじめる。

二月 制服を制定、男子は本校所定の制服制帽、女子は質素な和服に袴を着用。

五月 規則改正により師範科の学科目中にヴァイオリンが加えられる。

◎原田潤 (唱歌) 大正二年

本居長世 (ピアノ・和声) 大正五年

久野ひさ (ピアノ) 大正十四年

ハンカ・ペッツォルト Hanka Petzoldt (声楽・ピアノ) 大正十一年

授業補助 貫名美名彦 (ピアノ)

同四十四年（一九一〇）

三月 本校敷地内に女生徒の寄宿舎を新築、本郷の仮寄宿舎は閉舎。

九月二十一日 湯原校長欧米各国へ出張。

◎多久每 (伶人、講、ファゴット) 大正五年

授業補助 蜂谷龍 (ヴァイオリン)

同四十五年（一九一〇）

七月 学友会の土曜コンサート始まる。湯原校長帰国。

八月 選科に能楽囃子生徒養成規格を制定、九月一日より生徒募集（科目：笛・小鼓・大鼓・太鼓および謡）。

◎松坂春榮 (箏) 大正八年

山口菊次郎 (箏) 大正十一年

授業補助 大和田愛羅（唱歌）、信時潔（チェロ）、船橋榮吉（唱歌）

- (1) Sawlet の履歴書は、音楽取調掛に提出されていない。発音は『横浜ゲーテ座』（升本匡彦著）記載にしたがった。これは当時のジャパン・ダイレクターに記載されていた発音である。
- (2) Neo-Pe は履歴にしたがうとペリーと発音するようになっていた。本来ならば e にアクセントがついて Pei-Pe と発音するのではないかと思われる。